

■こんな面接の質問もある…。

ある日、カンザン・エレクトリックのコリン・ジャックスとマルガリータを飲んでいたら、こう聞かれた。

「電気工事士の面接って、どんなことをするか知ってる？」

知らないと答えると、コリンは説明してくれた。

「パイプを渡すんだ。そしてそいつを曲げるように言う」

私は、大男が素手でパイプを曲げようと奮闘する様子を想像して、仰天した。あんなものを人間の力で曲げられるのかしら。まさか。

「ちがうちがう、腕力の問題じゃない。こっちが見たいのは、応募者がどう答えるかだよ。どの箇所を曲げるのか、何度の角度に曲げるのか、といったことをちゃんと質問するか。それともやみくもに作業に取りかかろうとするか。発注者がどう曲げたいのか、何も考えずにいきなり作業にかかるような人間を雇うわけにはいかない。そうだろ？」

たしかに。

この質問もそうだが、面接で飛び出したい質問には隠された意図がある。多くの応募者は、まるで正しい答は一つしかないみたいに、正解をひねり出そうと四苦八苦する（正解が一つしかない問題なら、応募者全員を集めて試験をする方が手っ取り早い）。だが面接での質問は、そういうものではない。面接官が見たいのは、応募者が答えるプロセスである。前提条件を疑ったか、あらゆる可能性を検討したか、複雑な問題をどのように分解して整理したか……等々。

■行動に関する質問のサンプル(転職時)

- 1 全員が反対という状況で、自分の意見を主張した経験について話してください。
- 2 これまでに手がけたプロジェクトで、最大の失敗について話してください。
- 3 仕事のできない同僚や部下にどう対処したか、話してください。
- 4 苦渋の決断を下さざるを得なかったときについて話してください。
- 5 理性ではなく感情に訴えて問題に対処した経験について話してください。

■概算能力を問う質問

ジャンボジェット機（ボーイング 747）の中にはピンポン球がいくつ入るか？

アメリカでは一年間に何枚のピザが消費されるか？

どちらの答も私は知らないが、仮に知っていたとしても、面接では役に立たない。と言うのも、一見すると奇妙なこの種の質問は、応募者が答を知っているかどうかを問うものではないからだ。答を出すプロセスを見ることが、この手の質問の眼目である。そういう知識が日常生活で役に立つかどうかば大いに疑問だが、この種の質問の信奉者は、おおまかな数字を導き出す能力を測ることに意義があると主張している。

■特別寄稿 楽天に就職する方法 楽天社長 三木谷浩史

「ジャンボジェットの機内には何個のピンポン球が入りますか？」——面接でのそんな質問が、この本には紹介されています。エンジニアに関しては、楽天でもそういうテストを行なっています。

例えば、ある課題を与えて、こういう動き方をするプログラムを組むにはどういうコーディングをすればいいか、その場で紙に書かせたりする。そうすると、そのひとの思考のありようがはっきりと出るのです。ちゃんと数学的な思考、ロジックを持っているひとは数行のコードで目的を達成できる。そうでないひとは、細かく工程を割って記述してしまうため、コードが長くなる。プログラミングは簡潔であるほうがバグが少なくなってベターですから、こういう見極めはきわめて重要なのです。

(略)

とはいえ、単にビジネススキルや技術的に秀でていうだけでは不十分です。

まず楽天の掲げる理念に賛同したうえで、仕事上の困難にも立ち向かえる人を採用したいというのが、文系、エンジニアに限らずあります。

どんな人にも、学生時代なり社会人時代なり、困難にめげそうなきときというのはあるはず。音をあげそうなきときに何とか工夫して成し遂げたり、誰かの力を借りて達成したりといった経験があるかどうか。そこで逃げてしまっていないか。というところを、いろいろエピソードを聞くことで見ていきます。「こういった場合どうする？」というような質問を投げかけることもあります。